

◆荒井類 選

《永井荷風の皮肉》

かたいものこれから書きます年の暮 永井荷風

これのどこが滑稽俳句なんだ、と思った方もいらっしゃるだろう。では、説明させていただく。

昭和二十七年十一月三日、荷風は文化勲章を受章した。その記念に、荷風と文藝春秋社の社長との対談が持たれた。掲句はその際に詠まれたもので、荷風としては珍しく、口語の句である。

勲章を受章したということは、国家権力のお墨付きをもらったということだ。国家のお墨付きをいただいた以上、これからは、真面目で重厚でお堅いものを書いていきます。そういう決意を述べているように見える。しかし、永井荷風はそれほど単純な人間ではなからう。

要するに、この句には、男女の色事を専一に扱ってきた作家に国家権力がそんな榮譽を与えてしまっているのかな、という永井荷風の皮肉が潜んでいるのである。アインシュタインの舌（ベロ）を出した写真さながらに、永井荷風が舌を出しているかのようである。

《「遊び人」の荷風》

八文字ふむや金魚のおよぎぶり 永井荷風

これは現代人には説明なしにはわからないかもしれない。次のような辞書の定義を知っても、ん？それで金魚がどう関係するの？と思われるだろうか。

〈はちもんじ【八文字】(二)おいらんが郭(クルワ)内を練り歩くときの、八の字を描くような足の運び。「一を踏む」(『新明解国語辞典』より)〉

映画等で ^{おいらん}花魁 道中を見たことのある方はイメージできよう。花魁の独特の歩き方「八文字」――黒塗りの三枚歯の高下駄で、踏み出してから大きく外側に向かって弧を描く。その足の動き、振り袖の動きを、大きな鰭をなびかせる「金魚のおよぎぶり」になぞらえている。

逆に言えば、お尻ふりふりの「金魚のおよぎぶり」に、色っぽい遊女(花魁)

の姿を見ているわけで、これはその方面に造詣の深い「遊び人」の荷風ならではのことだと思う。

《高浜虚子の娘婿の俳人・上野泰》

上野泰(うへの やすし)をご存じだろうか。高浜虚子の六女章子と結婚した、虚子の娘婿である。彼は 大正七年(一九一八年)の生まれで、昭和四十八年(一九七三年)二月二十一日に没している。

「ホトトギス」の俳人として「東の上野泰、西の野見山朱鳥」と称され、昭和二十六年(一九五一年)には「春潮」を主宰した。今般上野泰句集『佐介』(一九五〇年)に目を通す機会があり、その俳句がなかなか滑稽俳句的であると感じたので。ご紹介申し上げたい。

大屋根に右往左往の霰^{あられ}かな 上野泰

〈あられ【霰▼】[分類]織物・糸、季語(冬)、天文(冬)①水蒸気が氷の粒になって降ってくるもの。雪と雹(ひょう)との中間の状態のもの。雪霰(ゆきあられ)・氷霰(こおりあられ)の総称。[季]冬。(『大辞林』第四版より)〉
その霰の降るさまを、霰たちが「右往左往」しているととらえた上野泰。上野のこの把握の仕方は、滑稽俳人としてのものだと思う。——霰たちが右往左往しているなんて、笑ってしまいますよね。

と、ここまで書いて、「右往左往」を含む有名な一句を思い出した。

莖右往左往菓子器のさくらんぼ 高浜虚子

《日本人の「孔雀の如き」お辞儀の姿》

春著きて孔雀の如きお辞儀かな 上野泰

〈大谷翔平 腰を折り曲げペコリ “お辞儀シーン”に米注目「オオタニの国の文化」〉〈走者一掃三塁打の後、ベンチに戻った大谷のお辞儀シーンが話題に〉
(THE ANSWER 二〇一八年四月十四日より)

メジャーリーガー・大谷翔平のお辞儀する姿が、引用した記事の見出しのように、アメリカで話題になった。多くの米国人の目に大谷のお辞儀姿はどう映ったのだろうか。「孔雀の如き」と映っているとしたら、上野泰の掲句は、大谷翔

平の生まれるよりずっと前に今日あるを予言していたことになる。

《たしかに「山と谷」だわ》

花どきや都心といふも山と谷 高橋道子

筆者は東京しか知らないが、読者の皆様はそれぞれの土地で、山と谷を思い浮かべられるだろう。

ところが東京には、「山」や「谷」の字のつく地名が多い。青山とか戸山とか、四谷や渋谷、日比谷。飛鳥山から急な坂を下ると、都電の王子駅前停留所。渋谷などは、ほんとうに谷底の街である。

掲句は、そういう地名のことを言っているのかもしれないし、起伏に富んだ街のありさまを詠んだのかもしれない。いずれにしろ言われてみると、「なるほど」と思い当たる。

(文中敬称略)